

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年小説の部 最優秀賞

夏の思い出

広陽小学校六年

湯浅ゆあさ

なな

「太郎はきつとドキドキしていたと思います。私も友達とけんかしてあやまる時はきつと——。」

今まで動いていたえんぴつの音が止まり部屋の中はエアコンの音だけになった。

今は夏休み。「上手な読書感想文」という本を片手に原こう用紙と戦っている。

「けんかしてあやまる、かあ。」

「上手な読書感想文」を見ると、「経験したことや、体験したことを書きましょう。」という文が目飛びこんできた。

「そんな経験ってあったかなあ。」

天井を見ながら十二年間の人生を巻きもどす。そういえばこはるとのことがあった。あの時、電話がかかってきたのは三年前の夏休みだったなあ。

プルルル、プルルル

「もしもし」

「あつ、もしもし。中村こはるです。千秋さんいますか。」

受話器から聞こえてきたのは元気がいいこはるの声だった。こはるはようち園からの友達でよく電話がかかってきて遊ぶ約束をしていた。その日の電話も明日、プールに行こうというものだった。

「ごめんね。明日いごとキャンプに行く予定だから。また今度行こう。」

「うん、分かった。じゃあね。」

その日の夜、いとこからの連絡があった。急に都合が悪くなったそうで、明日のキャンプには行けないという。せっかく楽しみにしていたのにと、がっかりしたが、今度また行くことになったため、ほっとしてその日はねてしまった。

次の日、たいくつだった私はとなりの家のかなちゃんをさそってプールに行くことにした。こはるからかかってきた電話のことなんて、すっかり忘れて。

プールに行く私たちはおにっこをすることにした。プールには、約束はしていないけれど、ぐう然会った友達が何人かいたので、十人くらいで遊ぶことになった。

つかれたので休けいしていると少し怒ったようなこはるが立っていた。「ねえ、千秋。こんなに大勢と今日プールで遊ぶ約束してたの？」

そのしゅん間、私は電話のことを思い出したしよげきと、こはるを裏切ったような気持ちで、体がかたまった。その様子を見たこはるは、私が昨日、うそをついたのだと思ったのだろう。さらに声をあらげて言った。

「なんで私を仲間に入れてくれなかったの！ それにいとことキャンプに行くつてうそまでついて。私のこときらいなの？」

「ちがうつて。こはる、落ち着いて話を聞いて！ 誤解だって！」

必死に反論する私に一切耳をかたむけず、こはるは

「千秋つて、さいつてー！」
と言って帰ってしまった。一緒に遊んでいた友達に「ごめんつ」と言つて、私はこはるを追いかけた。

「ねえ、待つてよ。」

更衣室で着がえている間も、こはるは、一度も目を合わせずに行つてしまった。私もあわてて着がえたが、そのときは、こはるはもう帰つてしまった後だった。

帰り道、重い足取りの原因は、重いプールバック、ジリジリと照りつける太陽、ミンミンを通りこしてギンギンになっているセミの声、そして一番大きなこはるとの仲。思いつきり息を吸う、

「はあくあ」

本日六回目のため息。足元にあった小石をける。思いつきりつけた小石は電柱にはねかえり、私の足に直げきした。うう、いたい。

痛い足をおさえながら家に帰る。お母さんが作ってくれたお昼ごはんがあるけど、食べる気にならな。ベッドに横になって、ポーツ

としていると、いつのまにかねむってしまった。

今、何時だ？ 部屋にかかっている時計を見ると針は午後六時を指していた。グウ。おながになった。そういえばお昼ご飯、食べてないんだっけ。キッチンに行っておにぎりにかぶりついていると、お母さんが帰ってきた。

「お帰り。」

「千秋、大変よ。こはるちゃんが熱中症でたおれて病院に運ばれたそうよ。三日で退院できるそうだけど、心配ねえ。明日、おみまいに行つてあげなさい。」

お母さんの言葉が信じられない。午前中は元気、というか怒れるくらいだったのに。

「ねえ、お母さん、それって陸上クラブの練習中だったの？」

こはるは運動が得意だ。地域の陸上クラブに入っていて大会でもよく入賞している。

「うーん、練習かどうかは分からないけれど、走っていたと中だったようよ。とにかく、明日は病院に行つてきなさい。」

「う……ん。」

その日の夜、何だか上の空だった。好物のカレーが出ても何だかおいしくないような気がした。宿題をしようとしたけれど、1＋1＝11と書いたり、「お」と「を」を逆にしたり、お前は小一か、とツツコミたくなるようなまちがいばかりで、集中できなかった。

翌日、おみまいに持っていくものを買に行つた。

「甘いものの方がいいかなあ。」

こはるが好きなチョコ味のアイスクリームを買って店を出る。こはるがいる病院に行こうとしたが今から行くと丁度、お昼ご飯の時間になってしまう。一度、家に帰ることにした。

家に帰って宿題を始める。しかし、昨日の夜と同じように集中できない。気づいたらこはるのことを考えている。

「あー！」

大声を出してもどうにもならないけど、イライラするんだからしょうがない。お昼ご飯のおにぎりを食べながらテレビを見て気分転換をする。テレビに夢中になっていると、あつというまに二時半になってしまった。

「あつ、もうこんな時間。」

病院までは歩いて二十分くらい。病院に着くのは三時前だろう。アイスクリームをふくろに入れて家を出た。

歩いていると中、こはるにどう言おうか考えていた。やっぱり謝つた方がいいかな。それで、気持ちが落ち着いたところでアイスクリームをわたす。これで仲直り完了。めでたし、めでたし。気持ちによゆうができた私は、足取りが軽くなる。病院の白いかべが見えてきた。

ウィーン。自動ドアをぬけて受付のお姉さんに病室の番号を聞く。エレベーターで三階へ行き、こはるの病室の前に立つ。ゆっくり深呼吸をして手をのばす。コンコン。

「どうぞ。」

というこはるの声がした。ドアを開けて中に入るとこはると目が合った。

「千秋、ごめん。」

「こはる、ごめん。」

同時だった。私はこはるが謝つたことにおどろいた。先に口を開いたのはこはるだった。

「ごめんね。勝手なかんちがいして。今朝、千秋のお母さんがきて、話してたら、千秋がうそをついてたわけじゃないことが分かったんだ。」

「そうなんだ……。でも、プール行こうつてさそってもらったのに、他の子で行つた私も悪いよ。」

そういうとこはるは、

「じゃあ、お互い様つてことにしとこ。」

と言つた。私たちはハハハッと笑い合った。ほっとした私は思い出した

ようにこはるに聞いた。

「そういえば体調の方は大丈夫？」

「うん。全然大丈夫。昨日家に帰ったあとで町の中走りに行ったんだよね。でも水とう持つていくの忘れちゃってさ。四周くらい走ったところでバタンとたおれたの。」

こはるはテヘツと笑った。

「千秋も走ればいいのに。明日からランニング始めない？」

「やだよ。私までたおれるよ。」

まあ、こはるが元気だって分かったからいつか。そして手に持ったビニールぶくろのことを思い出す。

「ああ、そうだ。こはるのためにアイスクリーム買ってきたよ。」

「わあ、ありがとう。」

喜んでふたを開けたこはるの顔は一しゅんで悲しそうになる。

「どうしたの？」

「このアイス。ジュースになってる。」

アイスのカップをのぞくと、とけてグジョグジョになった元アイスが入っていた。

「こはる……ごめん……。」

私の小さな声はセミの声にかき消されてしまった。

ああ、いけない。思い出をなつかしんでいると時間があつというまに過ぎてしまった。私はえんぴつを持ち直し、感想文の続きを書く。

「私も友達とけんかしたことがあります。そのときは私が謝ると、友達も謝ってくれました。そして仲直りした後には前よりもっと仲良くなりました。友達と付き合っっていく上でけんかはさげられないことです。そのけんかをどうやって——」

その時、電話がかかってきた。こはるからだ。

「ねえ千秋。明日一緒にプール行こうよ。」

その声は三年前と変わらないものだった。

